巻頭言

東京五輪２０２０を「世界平和の祭典」にしよう

石井　昭夫
観光研究家
元帝京大学観光経営学科教授

9 月 7 日の早朝、IOC ロゲ会長が TOKYO 2020 と書かれた横長のプレートを示し、トーキョーと発表した瞬間、日本中に歓声が上がった。翌日から数日間、テレビも新聞もオリンピック一色に染まった。

思えば東京は、戦前 1940 年のオリンピック大会開催地に初めて立候補し、36 票対 27 票でヘルシンキに勝ち、非白人の国として初めてオリンピック大会開催地となることが決まった。しかし、1937 年の盧溝橋事件に端を発する日中戦争の長期化が予想される中で、日本は五輪の開催権を返上し、1940 年大会は中止となった。太平洋戦争が始まり、主要都市を空襲で焼かれ、広島、長崎に原爆を投下されて日本は降伏した。一からの出直しとなった。

戦後初の 1948 年のロンドン大会に、敗戦国日本とドイツは招待されず、次のヘルシンキ大会（1952 年）から参加することができた。東京は改めて 1960 年大会に立候補したが、この時はローマに敗れた。再度 1964 年大会に立候補し、1959 年の IOC ミュンヘン総会で東京（34 票）、デトロイト（10 票）、ウィーン（9 票）、ブリュッセル（5 票）が競って、東京が大勝した。日本は大会成功のために力を尽くし、平和国家に生まれ変わった姿と、敗戦から復興した姿を世界に見てもらうことができた。閉会式では、戦い終わった各国選手団の整列行進が自然に入り乱れて歓喜溢れる友好集団と化し、ライブのテレビ画面で、その後は市川昆監督の記録映画の最上のシーンの一つとして、見るたびに胸を熱くした。

さて、東京五輪 2020 である。早くも経済効果への期待、国内のスポーツ振興、沈滞したムードからの脱却、震災と原発被害からの復興への貢献、日本のイメージアップの好機、エトセトラ、様々な期待や提案がマスコミを賑わせている。オリンピックの開催を自国の経済や社会の発展のために活用することは大いに結構である。しかし、国益視点のみで考えるのではなく、本来のオリンピック精神が持つ「世界平和への祈願」という旗印を高々と掲げる好機ではないだろうか。夏季オリンピック大会は前回のロンドンが第 30 回であった。そのうち、第 6 回ベルリン大会（1916 年）、第 12 回東京大会（1940 年）、第 13 回ロンドン大会（1944 年）の 3 回は戦争のため開催されなかった。

近代オリンピック大会の生みの親であるクーベルタン男爵は、第 1 回のアテネ・オリンピック大会（1896 年、参加国 14 か国、ギリシャを除く参加選手はわずか 40 数名）終了後、「仮にオリンピックが将来繁栄に至るなら —— 文明国家が皆協力してくれるならそうなるものと私は信じたいが —— 世界平和を確保する上で、間接的ながらも、強力な要因になるかもしれない」と述べている。古代オリンピックは、戦争中なら戦争を中断し、選手や観客の安全を保障してまで開催した。クーベルタンは、古代ギリシャ民族のためだけだったそういうスポーツの祭典を、世界規模に拡大して復活させようと夢見たのであった。

残念ながら、国民国家を原理とする近代世界において、近代オリンピックは、純粋に国を愛する個人の愛国主義（パトリオティズム）と国益第一の国家主義（ナショナリズム）との抜き差しならぬ関係が立ち現れる場ともなってきた。参加国が国旗を掲げて競うスポーツ競技会において、国家主義抜きの愛国主義が可能かどうかをクーベルタンは問いかけ続けた。彼自身は、スポーツ選手たちの行動を範としてそれが可能になると信じ、自らデザインした五大陸をつなぐ五色五輪のオリンピックのシンボル・マークを、1914 年 6 月の IOC パリ総会で提案した。直後に第一次大戦が始まったため、正式の制定は大戦後になり、オリンピック旗は 1920 年のアムステルダム大会で初めて翻ったのだったが……。

2013 年の今日、世界は真に平和を希求している。相手を殺すほど憎みあう心を人類はどうすることもできないのか、平和に共存することはできないのか。「平和とは何か」をもう一度考え直してみたい。憎みあいつつ武力闘争に至らない冷戦をも平和と呼ぶのであれば、それは消極的定義に過ぎない。しかし、他国を憎み嫌う心を持たない状態こそ平和であるとするなら、これこそが積極的な意味での平和であり、個人が貢献し得るのは、後者の平和にほかならない。クーベルタンはドンキ・ホーテの如く戦い、忘れられ、不遇のうちにジュネ―ヴ市内の公園で倒れ、人知れず亡くなった。時は過ぎ、今なら、クーベルタンの理想を真摯に受け止めることができるかもしれない。

東京五輪 2020 は開催地が東京で、新 IOC 会長はドイツ出身のトーマス・バッハ氏である。両国とも過去を反省し、今では平和主義に徹している。オリンピック大会を世界平和祈願の機会へと高めるには、東京五輪 2020 は最適である。経済効果や国益追求の上位にこの理念を掲げ、準備の 7 年間、オール・ジャパンで知恵を出し合うことはできないか。

ささやかな一案だが、「勝つことではなく、参加することに意義がある」というクーベルタンの友好親善の原則を想起し、敗者を「おもてなし」するプロジェクトを考えてみてはどうだろう。メダルを獲得する選手は参加者のほんの一握りにすぎず、彼らは勝ったことで充分に報われる。これに対し、遠路はるばる東京までやってきても、1 回の競技だけで敗れて去っていく選手たちが圧倒的に多い。日本国内を見て回る余裕はないかもしれない。勝利至上主義に陥りがちな昨今のオリンピックである。東京五輪 2020 では、敗退する大量の選手たちの健闘を称え、地方ごとに、種目ごとに、何らかの形で彼らを客としてもてなし、交流し、彼らの心の中に友情という平和の種を撒くことから始めてはどうであろう。世界平和へのささやか、かつシンボリックな一歩として。

国家にとっても平和が理想であることは、ＥＵの存在や日本国憲法が証明している。個人の考えと行動の集合が国家を動かす時代である。個人レベルの国際交流にほかならぬ観光こそ「平和へのパスポート」であると言った先人の言葉を改めてかみしめている。